

連載：研究者になる！－第90回－

白眉センター・特定准教授 井上 恵美子



1980年代に生まれた「持続可能な発展（Sustainable Development）」という考え方。それまではトレードオフの関係にあると考えられてきた「環境保全」と「経済成長」ですが、これらの両立が今後の社会の発展に重要であるということを示し、世界に大きな影響を及ぼしてきました。この考え方に出会った私は強い衝撃を受け、その実現のための方策を環境経済学の視点から真剣に考えるようになり、それがいま、現在の研究にもつながっています。

■社会のために動く「経済」の考え方に共感

経済学部に進学したきっかけは、「経世済民」という中国の古典の言葉。「世を^{おさ}め、民を^{すく}済む」を意味し、「経済」という言葉はこの略語です。私が思うに経済は根幹。経済活動が成り立たなければ、国の未来や自身の将来を考えたり、暮らしの環境を整えたりといった生産的な活動はむずかしくなります。「経世済民」という言葉から発展した経済学は、暮らしを改善し、人びとがよりよく生きるにはどうしたらいいのかを考えるもの。社会のための学問であることが魅力でした。

大学卒業後は、環境負荷の大きいインフラの整備に関わり、実社会において「持続可能性」がどう捉えられているのかを知りたい、「持続可能な発展」に貢献したいという思いから、企業に就職しました。運よく希望通り、高速鉄道の開発に携わることができ、多くのプロジェクトに関わりました。中国の高速鉄道プロジェクトもその一つで、日本コンソーシアムの一員として参画しました。

働くなかで感じたのは、利益の追求と環境保全とのバランスの難しさ。予想はしていたものの、いかに大企業であっても「持続可能な発展」を実現させることは容易ではないことを実感しました。そして、その限界を乗り越える方策を探るために、もう一度学問として学びなおしたいと、アカデミアの世界にもどる決意をしました。

■好奇心に導かれ、ふたたび飛び込んだアカデミアの世界

進学したオックスフォード大学では、知の探究の刺激を存分に受けました。これを一生の仕事にできたら幸せだと、研究者として歩む覚悟を決めました。海外で引き続き研究する選択肢もありましたが、日本の環境政策に携わっておられた恩師のもとで、研究に没頭しました。京大の研究環境は私にとっても合いました。研究テーマを主体的に決定できる分、時間配分や進捗管理などにも自律が求められますが、この自学自習の環境で学びを深めることができました。また困難があっても、熱意をもって努力し続けていれば、道が開けると実感できる環境でした。

学術研究の世界への挑戦に迷いはありませんでしたが、教員として、子育てをしながらの研究は一苦勞。同じく研究者である夫と育児や家事を分担してのりきっていますが、ときには寝不足のあまり研究がままならなくなったこともありました。そのようなときに、育児休業の制度についてお願いをしたことがあります。従来の制度では、出産や育児を考える研究者は白眉研究者への応募を躊躇する可能性があるのではないかと感じていました。私の世代には間に合わずとも、次世代に道が開かれるのならという思いのお願いでしたが、すばやく整備いただき、ありがたいことに私にも新制度が適用されました。京大にはこのような懐の深さがあり、感謝しています。

■計画書のない人生を楽しむ

ふり返ると、どのような経験もいまの研究に活かしています。私がいま力を注ぐ研究は、持続可能な社会の実現に向けて、近年のCOP（国連気候変動枠組条約締約国会議）でも気候変動を緩和する方策として注目されている企業のイノベーションをどうしたらより創出できるか、そのメカニズムを解明すること。膨大なデータを定量的に分析して客観的事実を明らかにする過程では、企業がどう考えて動くのかを実際に見てきたからこそ気付く視点が大きい役立っています。これからも実社会とつながりを持ち、社会への貢献を重視する研究者でいたいと思います。

学生たちと話していて気になるのは、最短距離で人生設計しようとする人が散見されること。人生はなかなか計画書どおりにはゆかないもの。様々な経験を積んで、予想外の人生を楽しんでほしいと思います。

Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>